

おふくろの指文字

宮川 行志

敗戦を終戦とすりかえた日の昭和二十年八月十五日から八カ月後。昭和二十一年四月十日、戦後初の衆議院議員選挙が行われた。

民主日本の再建という重大な使命をもつ選挙で、婦人にも初めて参政権が与えられた。定員総数の六倍に上る立候補者が乱立、婦人も八十人が立候補。熊本県からは五十六人が立候補した。紅一点の山下ツ子は見事当選。全国で三十九人の婦人代議士の中には松谷天光まつたにてんこうこう（後年白亜の恋で園田直代すなお議士と結婚）や、戸叶里子らがいて山下も婦人代議士の一人となった。

おふくろが、この選挙の一ヶ月前、三月初旬のある日、珍しく無言で納屋の影から私を手招きした。何か用、と言うとあわてて唇に人指し指を当てた。何か内緒ごとの気配が漂っていた。いつにない真剣な顔で私の耳許に口を寄せてささやいた。

「実は頼みがあるんだが……」と言って、言っていないのかどうか思案するのように、二、三秒間黙ったあと、意を決したように言った。

「字を教えてくれんかいなあ。恥ずかしいことだが、長い間字を書かんで忘れちしもうた。勉強せにゃいかんとたい。ほら四月十日は投票日だろう。立候補者の名前ば間違うといかんからなあ」と母は小声ではにかみながらささやいた。国民学校六年に進級直前の私に、自分の意中の立候補者の名前の字を習いたいと言うのだ。私には青天の霹靂へきれきのおふくろの頼みであった。私は訝いぶかしんだ。おふくろが字を知らないなんてまったく気がつかなかった。

おふくろは明治二十年生まれ。尋常科四年終了で、石版せきばんがノート代わり、温石おんしやくが鉛筆代わりの時代であった。農家に生まれ、幼くして父母を亡くし年の離れた兄に育てられた。兄は働き盛りで亡くなり以降、兄嫁の片腕として家を支えてきた。働きの者の嫁として、地主の息子の父と結婚した。父は農業を嫌い、役場勤めをしていた。そんな父と一緒にあったおふくろは父に悩まされた。父の選挙道楽に危機を感

じた祖父は父を禁治産者にし、廢嫡はいちやくした。父は競走馬飼育や製材業を起こし失敗し
わずかの農地をおふくろ一人で耕し、おふくろの才覚で魚貝の採集あきな、商いで、一家
九人の生活が支えられていた。子供八人のうち一人を死なせた。子供の教育には熱
心で七人全てに貧しい田舎から中等教育を受けさせた。父は事業の失敗で酒びたり
の日々を過ごしていた。そんななか四十五歳で出産した私を特に可愛がっていた。

「この子は末っ子だから親と別れるのが早いからなあ……」と言って寸暇
を惜しんで育んでくれた。農作業の段取り、農具の使い方、牛馬の使い方、漁具の
扱い方、天気の見方等、大人顔負けの生活力をおふくろは折りにふれ仕込んでくれた。
おふくろの手の五本の指は、大きく節くれだち皮膚はごつごつ荒く、節の皺しわは深
く、それぞれの指が力強く物を掴つかむ力は壮年の男の手を凌しのぐ力感があった。掌の皺
は生命線が真横に端から端まで走っていた。そんなおふくろの掌を使つて、選挙の
投票日前の十日間、毎日、納屋むしろの筵むしろの上で母子は指文字を書くことにした。

「片仮名、平仮名、それとも漢字にするよ」

「やつぱり漢字より、平仮名のほうが易しか。女子おなごだから平仮名が似合うよ」

おふくろは、女子だから平仮名が似合うと言う。それは自分も、自分の投票しよ
うとする立候補者も女性だからという二つの意味があったのである。選挙道楽の父
は自分の支持者に投票するよう頼んでいた。おふくろの結婚以来、初めての夫への
反抗である。

まず私の学習帳面に筆で大きく書いた。

「やました つね」(山下やましたツツね)を「や・ま・し・た・つ・ね」と、一音一音小声
で言つて懸命に練習した。秘密の特訓の甲斐あつておふくろは一日目に完全に覚え
てしまった。私の掌てのひらを、ささくれだつた掌でしっかり握り鉛筆を舐なめる仕草をして、
太い人差指に唾つばをつけて一字一字をていねいに書いてゆく。おふくろの唾がなまあ
たたかく、掌についてゆく。一字書くごとに、私の掌を目の前まで奉げ、肯く。私
の眼をのぞきこみ、これでいいかというように瞬まばたきをして微笑ほほえむ。私もそれに応え
て大きく瞬きをして微笑み返す。十日間の母子の指文字の稽古は、誰に知られるこ
ともなくあつという間に終わった。指文字の稽古は二人の生涯の最大の秘密であり、
楽しみでもあつた。

投票日の朝、父はいつにないやさしい声で自分の支持する立候補者の名
前を言つて「頼む」と言った。おふくろは、「生まれて初めての選挙だか

ら、わたしの好きなようにさせてください。お父さんの候補者は私が入れなくとも当選しますよ」と言って「わたしもこの選挙では勉強しましたよ」と続けた。父は、「そうか」と言って黙ってしまった。この日を境にして夫婦の力関係が変わっていった。

おふくろは投票に出かける前に、家族がいらないことを確かめて私に手招きをした。最後の指文字の稽古を私の掌でゆっくりなぞって、例の瞬きをし微笑んで出かけた。おふくろの意中の人は全国の三十九人の婦人代議士の一人として活躍する場を得た。

おおげさで面映ゆいが、民主日本の再建という重大な選挙を親子で指文字を通じて体験したのである。成人後の選挙の投票のたびに、おふくろの節くれだった掌を思い出し、なまあたたかい唾のくすぐったいような感触が掌によりみがえってくる。選挙の投票日は、懐かしくもうら悲しい想いが交錯する日でもある。

(終わり)



宮川 行志

一九五七年熊本大学教育学部卒。

三十八年間小中学校の教壇に立つ。
退職後趣味の野菜作りの傍ら、教育評論雑誌の編集に携わる。
文芸雑誌同人となるも活動なし。